

339

特257

246

訂改
長
月流
與
雜
子
手
附
級

始





著者
家九世
元世
望月太左衛門檢印

特 257
246



汐くみ

「松」木かはらぬ色のしるし迎今も榮に在原のかたみの鳥帽子狩衣着つゝなれにし佛とうつし繪島の浦風に合「ゆかしきつてを白浪のよする渚に世をおくる合」如何に此身が海士じやと云て辛氣しんきに袖濡て「いつか嬉しき逢瀬もと君には誰かつけのくしさし来る潮を汲うよ合波分て「見れば月こそ補にあり」是にも月の入たるや「月はトつ「影は二タつ三ツ」見られつも雲の上此所は鳴尾の松影に月を荷ふて合「やすらひぬ」見渡せば合面白やなれても須磨の夕まぐれ漁る船のやつしつし合波をけたてゝ友呼かはす濱千鳥の散やちり／＼ちりやちりちりちり／＼ばつと鹽屋の煙さへ「立つ名いとはで三年は此に須磨の浦はの松の行平立歸りこば我も小菰にいざ立よりて磯馴松のなつかしや「遺物こそ今は仇なれ見初てそめて」逢た其時やつい轉廢の帯も解いでそれなりに二人が裾へ狩衣を掛けてぞ頼む陸言に「可愛がらすのエ、何じややら泣て別りよか笑うて待とか待ばこんとの約束を「忘るゝ暇は「ないわいな」それから深う云かはしまの「水も漏さぬ中々に「濡による身は傘さして御座んせ人目せきがさ何時あふがさと「ほんに指折其日がらかさ合まつに長柄の辛氣らしそれへ／＼」氣を紅葉傘白張の殿子に操たてがさの相合傘の末かけて「誓文眞實つまをりがさと云れたら思ひも開く花傘「しほらしや「いとま申て歸る波の音の「須磨の浦かけて村雨と聞しも今朝見れば松風斗りや残るらん松風のく「晴は世々に残るらむ

手附の見方

一此の手附は御覽の通り長唄一番に對する、小鼓、大鼓、太鼓等の各手附を八拍子罫線の上に並べて書いてありますので囃子相互の關係は申す迄もなく唄、三絃、笛などの關係をも一目で分るやうに編集してあります、それです、此の八拍子の罫線をたどって囃子の手附と唄、三絃、笛などの關係とをよくよく御注意下さい、

一長唄には、拍子に合ふところと、合ハぬところとがあります、此の手附の

中に(拍子に合ふ)又ハ(拍子に合はず)と記してあります、併し、唄、三絃が拍子(罫線)に合ふところでも唯子の入らぬところは、八拍子罫線にこたはず書いてあります。

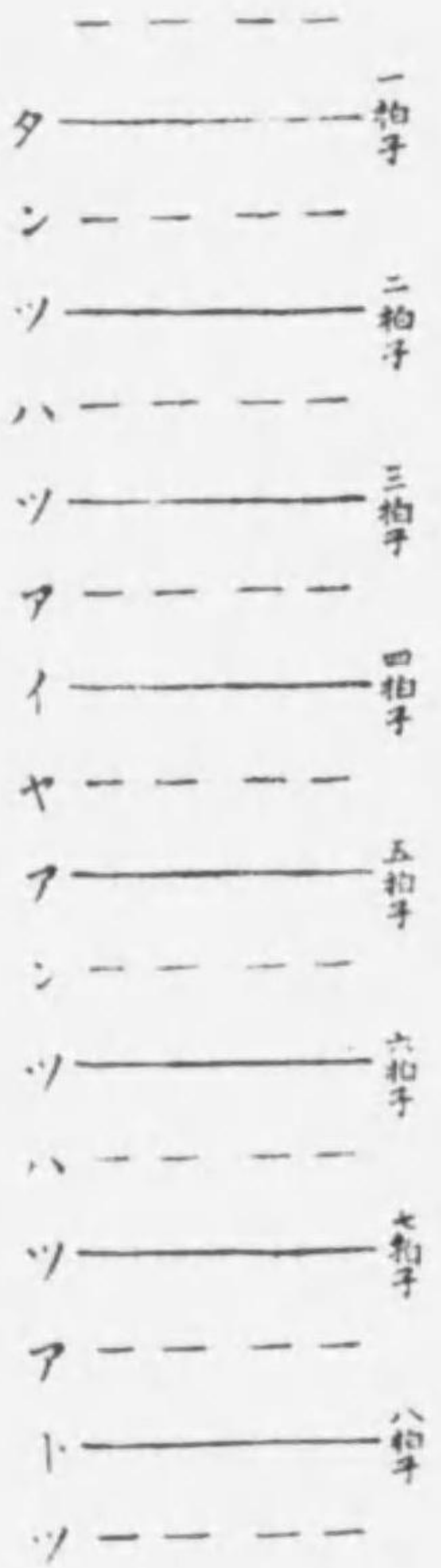
一手附中の符号ハ、朱書が小鼓の手、其の右側の黒書が大鼓の手、緑書が太鼓の手であります、笛の符号は唄、三絃と共に黒書にしてあります、がそれハ、大小太鼓の三拍子に必用のところだけに記入してあります

一手附中の欄外右端に一拍子二拍子

と書いてありますのハ、地拍子(表間)の符号で各拍子線の間の点線は一拍子二分の一の点としてあります、併し八拍子に割りきれぬ手は句切のよいところで八拍子に切上げ其の残りは特別の点線で仕切つてありますから其の場合手附は直に次の行に続くものと御承知を願ひます

一上欄は打ツ手の名稱及び就習後の手附符号であります。

一ツハツアイヤアンツハツアトツタン
 之ハ心の中で取る間拍子を表はし
 たものであります。此の内「ツ」の字は、
 コミ即ち半拍子を吞んで取るので
 す之を八拍子に割って記しますと
 左の様になります。



一之だけを一クサリと云ひます。
 一一番上の点線と一番下の点線は同
 じものであります。

一拍子線と点線との間へ挟まつた手
 附ハ四分ノ一拍子であります。

汐汲

(彩掛中舞三段)

ニエリ
 松一本変らぬ色の志し

今も榮に在京のかたみの烏帽子

狩衣着つたれにし儀を

大小鼓トル
 笛ヒシギ ヒイヤ

寫し繪島の浦風に

一戸打出し

ヒー

(位引立サヤリ)

シヤヨイ チチ

チチ

チ、チ

、

地
お放

ヤ△ハン

ハ△

△ヤ

ハ△

ハ○

○

、 チチチリンチチン チリチチリチ

汐汲

一

之ヲセツ引時ハ合テ持ツ

地
鏡長地

ヤア△ハン
ハ
●△ヤヤ
ハ
○△ハ
ハ○
○

高判

チン
チリチリチリチリチリチリチリチリ
○△
○△
ハ
○△
ハ
○
○

又ク打カケ

ツン
ツルン
テツルン
ツツン
ト
ヤア
ハア
ハア

合
合

イヤ△
イヤ△
ツトツ
チテ
ンチチ
チチチ
チツ
ツシ
ツシ
ツシ

寄すも清に世を送る 如何に

此の身が海女らやと云ふて辛気

志んきに袖濡ぬれ

いつか娘と逢瀬と君には

誰かつげの櫛 合 さし来る涙を

汲りよ合 汲分て、んれば月ふそ

桶にあり是にも月の入りたるや

月は一つ影は二つ二つんれつも

雲の上此処は鳴尾の松影に

月を荷い合 月ん泣せば

汐汲

大小鼓トレ

ニ

大小鼓下ニ置ク
以下拍子ニ合セス記ス
篠笛入ル

笛止ル

長地

ヤア△
ハン●
ハ▲
ル●△
ヤ●
ハ●
イヒヒヨ○△
ハ○
ーイウリ○

キサミ

ヤア△
ハン●
ハハ●▲
ラ△
ヤ●
ハ●
イヒヒヨ○△
ハ○
ウホウヒ○

ヌキ

ヤ△
ハン●
ハハ●▲
ラ△
ヒユ●△
イヒヒヨ○△
ハ○
ーイウリ○

高刺

ヤ△
ハン●
ハハ●▲
ラ△
ヒユ●△
イヒヒヨ○△
ハ○
ーイウリ○

ムスビ

ヤ△
ハン●
ハハ●▲
ラ△
ヒユ●△
イヒヒヨ○△
ハ○
ーイウリ○

打カケ

ヤ△
ハン●
ハハ●▲
ラ△
ヒユ●△
イヒヒヨ○△
ハ○
ーイウリ○

三投目

ヤ△
ハン●
ハハ●▲
ラ△
ヒユ●△
イヒヒヨ○△
ハ○
ーイウリ○

打カケ

ヤ△
ハン●
ハハ●▲
ラ△
ヒユ●△
イヒヒヨ○△
ハ○
ーイウリ○

ムスビ

ヤ△
ハン●
ハハ●▲
ラ△
ヒユ●△
イヒヒヨ○△
ハ○
ーイウリ○

ニラド

ヤ△
ハン●
ハハ●▲
ラ△
ヒユ●△
イヒヒヨ○△
ハ○
ーイウリ○

長地

ヤア△
ハン●
ハハ●▲
ラ△
ヒユ●△
イヒヒヨ○△
ハ○
ーイウリ○

キサミ

ヤア△
ハン●
ハハ●▲
ラ△
ヒユ●△
イヒヒヨ○△
ハ○
ーイウリ○

高刺

ヤ△
ハン●
ハハ●▲
ラ△
ヒユ●△
イヒヒヨ○△
ハ○
ーイウリ○

ムスビ

ヤ△
ハン●
ハハ●▲
ラ△
ヒユ●△
イヒヒヨ○△
ハ○
ーイウリ○

地

ヤ△
ハン●
ハハ●▲
ラ△
ヒユ●△
イヒヒヨ○△
ハ○
ーイウリ○

地

ヤ△
ハン●
ハハ●▲
ラ△
ヒユ●△
イヒヒヨ○△
ハ○
ーイウリ○

高刺

ヤ△
ハン●
ハハ●▲
ラ△
ヒユ●△
イヒヒヨ○△
ハ○
ーイウリ○

ムスビ

ヤ△
ハン●
ハハ●▲
ラ△
ヒユ●△
イヒヒヨ○△
ハ○
ーイウリ○

地

ヤ△
ハン●
ハハ●▲
ラ△
ヒユ●△
イヒヒヨ○△
ハ○
ーイウリ○

地

ヤ△
ハン●
ハハ●▲
ラ△
ヒユ●△
イヒヒヨ○△
ハ○
ーイウリ○

汐汲

ハ

位 輕目ニ
派手ニ
六ッ地

トツツン
トシ
チキチキ
ぬれ

チキチキ
トツツン
トツツン
トツツン
トツツン

よ
身
ハ
ハ

ツ
かさ
ご
せ

チ
チ
チ
チ
チ
チ
チ
チ

ひと
と
目
目
目
目
目
目

せ
き
が
さ
さ

チ
い
あ
が
と
チ

ト
チ
チ
く
く
ト

スト
ほ
に
ゆ
折
そ

その
日
ら
か
さ
ー

ト
ツ
ツ
ト
ツ
ナ
チ

リ
チ
ツ
ナ
レ
ン
に
レ
ヒ
ッ
ハ
ト

な
が
え
の

汲

+

昭和六年八月一日印刷
昭和六年八月八日發行

東京市日本橋區浪花町十七番地

望月太丸衛門

著作者 安部光之助

東京市日本橋區住吉町二十番地

發行者 法木德兵衛

東京市芝區愛宕町三丁目卅二番地

秀美堂印刷所

印刷者 五十嵐清勝

發行所 東京市日本橋區住吉町二十番地 法木書店

電話 德龍一七一〇番

不許複製轉載

既刊目次

- 第一編 末廣狩
- 第二編 竹生鳥
- 第三編 小鍛冶
- 第四編 鶴辨慶
- 第五編 淺妻船
- 第六編 鞍馬山
- 第七編 以下逐次出版
- 第八編 常磐の庭
- 第九編 四季の山姥
- 第十編 越後獅子
- 第十一編 五郎勢ひ
- 第十二編 新浦島
- 第十三編 勸進帳
- 第十四編 安宅の松



終

